

初期俳諧注釈

『大坂獨吟集』重安獨吟百韻

前説

延宝三年（一六七五）刊『大坂獨吟集』は、西山宗因が評点を加えた、鶴永（西鶴）ら大坂俳人九人による獨吟百韻十巻を収める。その内九巻を注釈し諸誌に発表した時点で、新日本古典文学大系『初期俳諧集』（岩波書店）の校注を担当し、全巻に粗注を施した。ところが同書は、狭隘な紙幅に厳正な字数の制限（一句当たり語釈・句意・付意すべて約百二十字）を強いたため、割愛した文献の引用・注語も多く、甚だ意に満たぬものとなった。そこでこの度、本誌の紙上を借りて残る一巻の注釈を試みようと思う。すなわち重安獨吟百韻の注釈であるが、もとより本誌にも紙数の制約があり、充分に委細が尽せぬことをお断りしておかねばならない。

例言

乾 裕 幸

一、本文の漢字はすべて現行の字体に改めた。

一、宗因の批点は、便宜上長点を◎、平点を○で表わした。句頭の印がそれ。

一、（類）とあるのは『類船集』の略称である。

作者

重安は伊勢村氏、名は宗善、通称伊勢村屋弥右衛門。難波津散人とも号した。（延宝三年自序『糸屑』）。同じく伊勢村屋を名乗る人びとに、二万二千石相良遠江守の名代で高麗橋住の新右衛門を初め、俳号意朔（九兵衛）・次良（忠三郎）・頼次（九郎右衛門）・重明

(治右衛門)らにいた。重安はこれらの同族か。延宝七年(一六七九)刊「難波すずめ」に「長堀こんや町」の住とし、明暦四年(一六五八)刊梅盛編「蜀鵲集」での肩書に「仏師」とある。明暦年間(一六五五―一五七)の頃から活躍し始めた大坂の古参俳人で、初めは貞門の高瀬梅盛に師事したと思われる。万治(一六五八―一六〇)―寛文(一六六一―一七二)の交わる頃から西山宗因に近づき、寛文三年(一六六三)十月、宗因・玖也・春倫と四吟百韻を興行して松江重頼の批点を受けた(寛文四年刊重頼編「佐夜中山集」)が、同五年には「大坂俳諧雪千句」を編み、自作を含む「雪」の百韻十巻に、重頼・未得・玄札・一幽(宗因)・玖也・道寸・季吟・立圃・成安・空存の批点を得ることによって、宗因を大坂俳壇の盟主にまつりあげるべく画策した。延宝元年(一六七三)西鶴の「歌仙大坂俳諧師」では、巻軸左座に大坂俳壇の最古参休甫(右座)と並んで坐るほどの地位を得ている。同三年には大坂俳人の作を網羅した「糸屑」を編集刊行した。延宝八年三月に「破邪顕正返答之評判」、同年五月に「俳諧備前海月」を著して、岡西惟中との間に激しい論戦を展開した「難波津散人」は、この重安である可能性を否定できないが、同年刊和氣遠舟編「太夫桜」には僅かに一句を寄せるのみだし、翌延宝九年(一六八一)に出た斎藤賀子編「山海集」では、「皆ちりく」に成「(同書序)った人びとの中に入ってもいるので、

この「難波津散人」は故野間光辰氏の推定されたとおり、片岡盲怒である公算の方が大きい。しばらく存疑とすべきだろう。没年は未詳であるが、俳諧活動の終息した延宝末―天和年間(一六八一―一七三)ではないかと推測される。

成立

「大坂獨吟集」に収める「葉喰」の獨吟百韻は、宗因の署記が延宝二年春以降に用いた「梅翁」であること、本集の刊行が延宝三年四月であること、発句の季が「冬」であることから、延宝二年冬以前、百韻中延宝元年創設の錦帯橋による付合(二才十三―十四)、および同五月皇居焼失復興に基づくと推定される付合(名才十二)があることから、延宝元年冬以降、すなわち延宝元・二年のいずれかの年の冬の成立であり、宗因の加点は延宝二、三年春と推定される。

「大坂獨吟集」に収める百韻十巻の内、この巻に限り、重版(厳密には四版)に際して削除・埋木による校正が行われている。その実態は次の通りである。

	初 版	四 版
初ウ二十	座興がましく夕きりかほる	念比ふりしやりいふも冷し
判 詞	物語二候哉源氏頭中将ノ事歟	(削 除)
初ウ二十一	花の比ハかし銀濟せ懸慕うたん	花の比ハかし銀濟せ又かさん
二ウ十一	日高く起	日高 起
名オ五	雪井よりたゝもり給へ立名さか	雪井よりたゝもり給へ聞へさか

初ウ二十および同二十一の修正は、宗因の批言を削除するためであつたことは明らかである。二ウ十一は「く」の欠損。名オ五の修正は不明である。

注釈

○薬喰や七日干さらん料理鍋 重安

此本哥今まで残候説珍重々

○発句。○冬（薬喰）。

○薬喰―冬季、保温・栄養のために鳥獣の肉を食べること。寒中のスタミナ食。『滑稽雑談』に「寒に入て、三日、七日、或ひは三十

日が間、其功用に依じて、鹿・猪・兎・牛等の肉を食ふ」とある。
○七日干さらん―七日間乾くことがないであろう。「河やしろしのにをりはへ干す衣いかに干せばかなぬかひざらむ 貫之」（新古今集卷十九・神祇）による。

○薬喰の鍋は、七日間食べ続けるので、その間乾くことがないであろうの意。

○宗因判詞 俳諧にあまり引くことのない本歌を用いたとして、句作の珍奇さを賞したのであらう。

○霜さき鴨も冬こもるゆき

○脇。○冬（霜さき鴨・冬こもる・ゆき）。

○霜さき鴨―霜の降り始める頃の鴨で、脂がのつて頂上。「霜先」は珍重すべき意に用いられることが多い。また薬喰は霜先の十月頃にも多く行われる。「薬喰」に付く。「羽音をは霜さき鴨や薬喰 作者不知」（『毛吹草追加』）。

○霜先鴨も雪の季節には冬籠るという意。前句を、霜先鴨を七日間も薬喰いに食し冬籠る人とみた付け。

○狩場には出立こゝろの駒留て

○第三。○冬（狩場）。

○出立こゝろの駒―「出立ち心」(出立とうと逸る心)に「心の駒(制し難い心情を駒に誓えていう。いわゆる意馬心猿)の言掛け。

○駒留て―「駒とめて袖うちらはふかげもなしさのわたりの雪の夕暮 定家」(新古今集卷六・冬。謡曲「鉢木」等所引)によつて前句「ゆき」をあしらつた。

○霜先鴨が雪に籠っている狩場へ、出立とうと逸る心を制しているさま。

殿の目見えを待て有明

○初才四。○秋(有明。月の座を三句引上げる)。季移り。

○殿―「狩場」「駒」に付く。「殿―鷹野・馬」(類)。○目見え―日葡「Meniye 人の前に顔出しをする」。○待て有明―待ちて有りに有明の言掛け。有明は十六夜以後、夜明けの空に残る月。

○有明月の残る早朝、狩場に出立つ侍が逸る馬を制御して、殿のお見えになるのを待つというのである。

秋風の手分し尋ぬ中扈從

○初才五。○秋(秋風)。

○秋風の手―「秋風」に「風の手」を掛ける。「秋風」は「有明」に対する季のあしらい。「風の手」は、草木などを吹き動かす風の

擬人化。「手分し」に掛かる。○中扈從―中小姓(性)とも。一般に小姓組と徒士衆の中間の身分で、外出する主君の供や祝日の配膳・酌役などを勤めた、三両一人扶持の下級武士を言うが、ここは殿の寵愛する中小姓をいうのであろう。

○風が草木を吹き分けるようにして尋ね当てた中小姓が、殿にお目見えするのを待つという意か。「目見え」には、新規採用者が主人に初めて挨拶する意がある。

◎式百俵と雁に告こす

○初才六。○秋(雁に告こす)。

○雁に告こす―匈奴に囚われた蘇武が、雁の脚に手紙をつけて漢朝に送った故事から信書をいう。「飛ぶ蜚雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ」(伊勢物語四十五段、後撰集卷五・秋)を踏んで「秋風」をあしらつた。

○前句の「秋風の」を單なる序詞とみ、中扈從を手分けて探すと読んだ付けであらう。中扈從は見付かったが、禄高二百俵ではどうか、という意。

○北前の舟賃ちろり虫の声

○初才七。○秋(虫の声)。

○北前の舟―「和漢船用集」に「北国舟 加賀・能登・越後・津軽・南部等の舟也。是を北前舟、北国舟といふ。俗呼てどんぐり舟と云は、其形の似たるを以いふなるべし」とある。中世から近世初期にかけて海運の中心的存在であった千石積前後の大形回船。寛文十二年西廻りの海運（奥羽・北陸方面↓日本海↓下関↓瀬戸内海↑大坂）が開かれ、北国米の大坂輸送が盛んになった。作者にはなお耳新しい出来事。○舟賃ちろり―舟賃に、松虫の異称ちんちろりんを言掛けた。因みに越後から大坂までの舟賃は、西廻り海運で百石当たり十九石。○虫の声―「米―虫」（類）。○越後あたりから米二百俵を北前船で回送する旨の報せがあった。雁の使いだけに、舟賃も虫の声ほどと辻褄を合わせたのである。

○荷をつくらする小田の綿買

○初オ八。○秋（綿買）。

○小田―小田郷などという固有名詞に普通名詞（上方では木綿を田に作る）を言い掛けて「虫の声」をあしらった。「虫―田」（類）。

○綿買―北前船の下り荷に木綿・繰綿・茶などを買いつける。【類船集】「綿」の条に「大和・河内・摂津よりは木綿を出す」とあり、

【毛吹草】巻四「從諸国出古今名物」に「郡山繰綿」（大和）・「久宝寺木綿」（河内）・「福島細木綿」（摂津）が見える。「綿」は虫に

付く。「虫―綿」（類）。

○小田郷の商人は、北前船の下り荷に、大和・河内・摂津などの名産の綿を買い込んで、荷に造らせる。

御年貢は一村里の九十月

○初ウ一。○雑。

○九十月―九月（晩秋）から十月（初冬）にかけて。綿買の時節に当る。次句冬季への橋渡し。

○八、九月、綿買商人が小田の綿を買い込んで荷を造らせて行くと、一村里は年貢の納め時を迎える。

○春をえまたて奉公のくち

○初ウ二。○冬（春をえまたで）。

○春の出替は初め二月五日、寛文九年より三月五日。九、十月に年貢を納めると、それまで待てなくて奉公口を求める貧農のありさまである。

◎自身番添番太郎町くゝに

○初ウ三。○雑。

○自身番―十月から翌年二月末まで、火の用心のため町内で組織さ

れ、町の四辻・町境などに設けられた番小屋に、地主後に大家・書役などが詰めた。○添番―自身番に添えられた番人。○番太郎―こは添番に同じ。番太とも。木戸の傍に番小屋を設けて住み、昼は小間物・駄菓子などの小商をした。

○一句は町々に番太郎がいるという意だが、前句に付いて、春の交替を待てずに求め得た奉公口が、町の木戸を守る番太郎であったということになる。

○光る燈心三筋四つ辻

○初ウ四。○雑。

○燈心―トウジミ（下学集）とよむ。「かたこと」に「ろうしん燈心をとうしん・とうずみなどはわろし」とある。ただし「るいせん類船集」にはトウシンとルビ。○三筋―燈心三筋に、京六条新町の通りなどのような三筋を言い掛け、下の「四つ辻」を引出した語法。○四つ辻―上の三筋を受け、三つ四つに言い掛けた。「自身番」に付く。「四辻―番屋」（類）。

○町々の三叉路や四つ辻に燈火が三つ四つ光って見える。それは番太郎が掲げる提灯の灯であろうというのである。

○小まものや出見せのめかねめさるへし

○初ウ五。○雑。

○小まものや―「燈心」に付く。○出見せ―露店。三叉路や十字路など人通りの多い所に店を出す。○めかね―「燈心」に付く。「燈心―目がね」（類）。

○三叉路や十字路に三筋四筋と燈火が光るのは小間物屋の露店、この場合夜店のそれと見たのであろう。また「眼鏡をお求め下され」と付けたのは、前句から、燈心が三筋にも四筋にも見えるという意を説きとり、それを目の悪いせいとみたためと思われる。

長崎よりものほるまたう人

○初ウ六。○雑。

○長崎―「小まもの」とくに「めかね」に付く。「毛吹草」長崎の物産に、木綿・畝指踏皮・簪紙・紙帳・紙被・唐蒔絵・土圭細工・絵筵・繪簾・竹曲簾・十露盤・丸子・白多葉粉等、「長崎夜話草」に「長崎土産物 眼鏡細工」を挙げる。前句「出見せ」を長崎本店に対する支店とみた付けであらう。○またう人―全人・真人等の字を宛てる。純朴で正直な人をいう。

○正真正銘の長崎の眼鏡細工と称して、似せものを売りつける詐欺まがいの小間物屋（香具師）が多い中、長崎からはまっとうな商人も上つてくるというのであろう。

耳のあか取梶はらてはやるらし

○初ウ七。○夏（梶はら）。

○耳のあか取―耳垢取りを業とする者。ほとんどが唐人で、似せ者も多くいた。『嬉遊笑覧』に「〔江戸鹿子〕に神田紺屋町三丁目長官とあり〔五元集拾遺〕観音で耳をほらせてほと、ぎす〔雙絨輪〕延たる爪は指のふくりん／耳掘の髭唐物の似せ渡り」、〔京羽二重〕に

「耳垢取、唐人越九兵衛」とある。なお「甲子夜話統篇」巻八十四に、金剛流脇師竹内彦三郎の先祖唐人三官（正応二年九月八日没）

について、「三官、御耳のあかをとり候ことを能くす（略）同集

（京伝『骨董集』）享保頃の事を記して、松浦渴平戸と云所に、優なる草の屋をかりて云々、髪を惣なでつけにして、長崎一官と名をつき、都ではやる耳の療治人の似せをして、京の一官願して云々。か、

れば其頃、京に一官と云耳の垢取りありしならんと。されば西辺吾が領邑あたり迄も、此こと行はれたるなり。一官・長官など皆三官が流れなること想ふべし」と記す。前句「またう人」を真唐人と読みかえた付けであろう。○取梶―耳の垢取に梶原を接続し、「のほる」をあしらった。○梶はら―梶原虫。『和漢三才図会』「蚰蜒（げぢ〜）の項に「昔以梶原景時比三蚰蜒。言心動則入蟻於耳、為害也」とあり、げじげじをいう。また同書に「好脂油香故入

人耳及諸竅中。用龍腦地龍腦砂單吹之、或以香物引之、皆効」と見え、これが耳に入ると考えられていたことや、その除去法などが分かる。

○最近げじげじが殖え、耳の孔に入って害をするので耳の垢取りを業とするものが繁昌し、唐人を装う療治人もいるが、長崎からも本物の唐人が上ってくる、というのである。

やすさに入のある芝居銭

○初ウ八。○雑。

○やすさ―当時芝居の見料、席料棧敷二百文・追入幕見十二文。半畳敷けば六文。○芝居―前句「梶はら」を、判官物の芝居で敵役・憎まれ役の梶原平三景時に取成した付け。梶原の逆鱗と取舵は縁がある。

○見物料が安いので、梶原景時の出る判官物がよくはやる。これは目の保養ならぬ耳の垢取るほどの保養にはなる。

◎簡略の世は皆酔りかふき子に

○初ウ九。○恋（かぶき子）。

○簡略―勘略とも。儉約の意。お上の令により当時は諸事儉約。

『武道伝来記』七の一に「御当代になりて、諸国御簡略に付、御自

分祿七年以前に御越の時有し泉水も、内証舟遊山の聞えよろしから
じと、それをも潰し、跡には蘊鉄山をいたし、其外の榮耀道具みな
減少いたし」。前句「やすさ」のあしらい。○世は皆酔りー謡曲
「松虫」「今は濁世の人間、ことに拙なきわれらにて、心もうつろふ
や、菊をた、へ竹葉の、世は皆酔へり、さらばわれひとり醒めもせ
で（略）舞ひかなで遊ばん。盃を廻らす花のそでおもしろや」。○
かぶき子ー歌舞伎子。若衆方の歌舞伎役者で男娼を兼ねた者。売若
衆とも。

○万事儉約の世の中、せめては見物料の安い歌舞伎芝居を觀て、世
間の人はみな歌舞伎子の色香にうつつを抜かしている、というので
ある。

かの裏小袖ひきちぎる月

○初ウ十。○秋（月、定座）。○恋（ちぎる）。

○裏小袖ー袖口を二重に仕立てた小袖の裏の袖口。○ひきちぎるー
小袖びき（小袖を引出物にすること）に袖ちぎる（男女相会する意）
を掛けた語法。○月ー月の座を満たすための投込みであるが、「袖
の月」の歌語もある。

○世間の人は皆歌舞伎子の容姿に夢中になって契りを結び、裏小袖
をプレゼントしたりするという意か。

○千話くるひぬいておとする太刀の露

○初ウ十一。○秋（露）。○恋（千話くるひ）。

○千話くるひー痴話喧嘩。前句を争って裏小袖を引きちぎると読ん
だ付け。○おどするー威す。○露ー「月」に対する秋季のあしらい。
これも投込みであるが、「抜けば玉散る」（「譬喻尽」）とあり、太刀
抜くの縁。

○裏小袖を引きちぎるやら、刀を抜いておどすやらの痴話喧嘩。

座興がましく夕きりかほる

物語に候哉源氏頭中将ノ事歟

○初ウ十二。○秋（夕きり）。

○座興がましくーその場限りの戯れめかして。○夕きりかほるー源
氏物語の登場人物、光源氏と葵の上の子の夕霧と、柏木右衛門督と
女三宮の不義の子薫に、自然現象「夕霧薫る」を言い掛けて秋季を
満たした。

○夕霧と薫が座中の戯れめかして、太刀を抜いて威す痴話狂いを演
じたというのであるが、これが光源氏と頭中将のエピソードを取り
違えたものであることが、宗因の判詞から分かる。なお夕霧と薫に
遊女の源氏名を掛けたとすれば恋の句となる。

○宗因判詞―源氏物語「紅葉賀」に、光源氏は好色の老女房源内侍にからかい半分で関係したが、その寝所に忍びこんだ頭中将が、戯れに「物もいはず、たゞいみじう怒れる気色にもてなして、太刀をひき抜」きおどすのを、源氏が「太刀抜きたる腕をとらへて、いといたうつみ給へれば、ねたき物から、え堪へでわらひぬ（略）中将の帯をひき解きてぬがせ給へば、ぬがじとすまふを、とかくひきしろふ程に、ほころびほろ／＼と絶えぬ」とあるエピソードを、夕霧と薫のことに誤った付合を咎めたのである。「源氏知らず」の不名譽であるため、この批言を削除すべく、重安は付句を「念比ふりしやりいふも冷し」と修正した。「念比ふり」は懇ろぶり。特別情交の深いさまに振舞う恋の詞。これに、相手の気を引くためにすねてみせる意の「ぶりしやり」を言い掛け、痴態の「冷じ」さ（秋季の語）を付け寄せたのであるが、痴話喧嘩が三句にわたるきらいがある。

花の比ハかし銀消せ懸碁うたん

○初ウ十三。○春（花川定座）。季移り。

○かし銀―借銀。○懸碁―賭碁。

○花の咲く三月の勘定日には、借りた金子を返済して、また賭碁を打とうという意。夕霧と薫が座興に賭碁を打つとみた俳の狂言であ

る。重版は座五「又かさん」。前句「念比ふり」をことさら懇意に振舞いすねる意とみて、三月の節季には借銀を返済せよ、その上にならまた貸そうと言ったと読める。しかしこれは不自然で、「又かさん」は「又からん」の誤刻ではないかと思う。この場合は、懇ろぶって甘えてまた借銀しようの意となる。

◎やらふやるまひ此家さくら

○初ウ十四。○春（家ざくら）。

○家ざくら―山桜に対して庭先の桜をいう。「御傘」に「家桜 春也、植物也、居所也」。前句「花」に付く。同じく「御傘」に「花」に桜は付侍る。されども前句の正花桜めきたる句躰ならば同意に成間無用に侍。桜に花をばたく付べからず。連歌には桜と花と面をきらひ、俳諧には七句隔る也」。こゝは前句桜めくが、「花の比」と未来のことをいうゆえ同意にならぬか。

○前句の碁の賭物を家桜とした付け。源氏物語「宿木」の、帝と薫が賭碁を「打たせ給ふに、三番にかず一つ負けさせ給ひぬ。ねたきわざかなとて、まづ今日はこの花一枝ゆるすと宣はすれば、御いらへ聞えさせで、おりて面白き枝を折りて参り給へり」によるか。ただしこの「花一枝」は女二の宮を寓するから、次句へは三句のわたりとなろう。前句「又かさん」或は「又からん」の場合は、「此家

ざくら」は借金の抵当である。

◎談合は永くの日縁組に

○二〇一。○春（永くの日）。○恋（縁組、「御傘」「恋の句とく」三句去也）。

○談合―ダンカフ。話し合い。○永くの日―「談合はながながに永日を言い掛けた。」「家ざくら」への春季のあしらい。

○前句の「家ざくら」を寵愛する娘の譬とみ、嫁にやろうかやるまいか、縁組の条件をめぐって、永い春の日に、終日ながながと交渉が続くというのである。

◎膝を直す我恋の山

○二〇二。○恋（恋の山）。

○膝を直す―膝を崩す。諺「膝とも談合」（『毛吹草』）によって「談合」に付く。「膝―談合」（類）。また「縁組」の「組」と「膝」は縁語。「組―膝」（類）。○恋の山―「御傘」に「恋が山のごとく積たかきと云心也。故に新式にも山類にあらざる所に入たり。併出羽の名所に恋の山とて有。依「句躰」名所たれば山類に成也。され共恋の山、句躰どち共わけがたき物ならば、作者次第にすべし。作者も落着しかねば、宗匠只恋のたとへになして山類にきらは

ぬが能なり。是古実也」とある。ここは譬え。

○一句は無心所着であるが、前句に付くと、恋の山を登りかねるごとく、縁組の相談が永日をよいことにながながと続き、とうとう痺を切らして膝を崩すという意になる。

○若後家の手代と中もよい所帯

○二〇三。○恋（若後家・中もよい所帯）。

○手代―商家に丁稚小僧として奉公し、成人して番頭に次ぐ地位を得た者。

○商家の主人が死んで、若後家が手代とわりない仲になり、所帯を結んだ。前句を、膝を崩してしなだれかかる女の媚態と説んだ付け。

○数の鍋尻やくたいもなし

○二〇四。○夏（数の鍋）。○神祇（同）。○恋（同・鍋尻やく）。

○数の鍋―四月一日に行われる近江国（滋賀県）筑摩神社の祭礼に、女が契りを結んだ男の数だけの鍋を頭に頂いて参詣する風習があった。『毛吹草』「俳諧恋之詞」に「つくま祭に鍋をかつく」。○鍋尻やく―「やく」は焼く。夫婦が世帯を結ぶ意。『宝蔵』に「彼しもなるきざみの室むかへて、家のうちのうしろみなどたのめるを、鍋尻やくなどいへる」とある。前句「所帯」のあしらい。○尻やく―

忍耐心がなく、落ち着きのない人を尻焼け・尻焼け狼という。「尻やけざるをちとたしなみやれ／初娘はそだちを人がいふものぞ」〔西山宗因千句〕。○やくたいもなし／埒もない。

○一句は右の各語を掛詞によって連鎖し、若後家が尻の軽い女で度々所帯をかえるため、近江の筑摩祭には沢山の鍋をかついで参詣することだろう、埒もないことだ、といったのである。

○大船のあかへ修理をとくせなん

○二オ五。○雑。

○あかかへー船底に溜った水を汲み出すこと。『和漢船用集』に「尻 和名類聚蔣鮎切。切韻曰。尻洩。舟中水之斗也。和名由土利。字彙云舟中掃水器。渾同字。注曰。此字本单作尻。舟中漑水器。後人以其漑水遂加水。又桶同尻斗。去水斗也。雜字大全に尻斗と書。蒙園梔になげつるべとするは誤か。今すつぽんと云。合類節用に訓をつけた。又川舟にては小さくひと云あり。治汲杓あり。みなゆとり也。尻斗を架して治を船がわの外へとる桶を居尻と云」とあり、大船のあかがえには尻（すつぽん）と称する木製のポンプを用いたことがわかる。○とくせなんー早くやってほしいものだ。伊勢物語百二十段「近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の数・見む」によって「数の鍋」をあしらった。

○大船のあか替え修理を早くやってほしいものだ。あか取り杓のかわりに、いくら沢山鍋を用いても埒が明かない。

住よし参浪にぬらすな

○二オ六。○神祇（住よし参）。

○住よし参ー住吉祭は夏季（六月三十日）であるが、参詣は無季。船で参詣することが多く「大船」に付く。「船ー住吉の神」（類）。

○着物の裾を海水に濡らさぬため、住吉参りの大船を早く修理してほしいものだ。

○蛤を磯立ならしにしろとて

○二オ七。○春（蛤、春季一句捨て）。

○蛤を：ー「住吉参」に付く。『守貞漫稿』に「三月三日：大坂は住吉、江戸は深川洲先等に汐干狩群集す」、「摂陽群談」に「住吉大社 毎歳三月三日汐干祭、此日当社ノ浦辺ヨリ淡路ノ海ニ至リ白浜ト成て、人皆州中ニ遊ブ」。○磯立ならしーただ磯に立つての意。「こよろぎの磯立・ならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ浪」（古今集東歌・さがみうた）を踏んで「浪にぬらすな」をあしらう。○にじるー蹶る。踏んで探る。『改正月令博物筌』に「蛤をにじるといふは、海辺にて取ることをにじるといへり」とある。

○前句の「住吉参」を、住吉の浦辺の汐干狩に行き、蛤を踏み探ると転じた付合。

腰からけ見る松もはつかし

○二〇八。○雑。

○松もはつかしー「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はんこともはつかし」(古今和歌六帖五・雑思・名を惜しむ)、またはこれを踏まえた源氏物語「桐壺」「松の思はむ事だに恥かしう侍れば」による。「松ー磯・埴干」(類)。

○磯に立ち裾をからげて蛤を蹴るあられもない女の姿勢に、松の見る目も恥かしい。

○おさあひを一里塚までおい女房

○二〇九。○恋(おい女房)。

○おさあひー「おさない」の転、幼児。○一里塚ー里程標。松を植えて目印とすることが多い。○おい女房ー「貢ひ」に「老い」を掛けた。前引古今和歌六帖・源氏物語は老残を恥じる文意。「毛吹草」誹諧恋之詞「老女房」。「松」に付く。「老ー松」(類)。

○一句は、老女房が幼児を一里塚まで貢つて来たという意。尻からげたその姿は、松の見る目も恥かしいというのである。

つれ待合やすむ在郷

○二一〇。○雑。

○つれー連れ。羈旅の文脈中にあらわれる。前句「おい女房」に付く。「連ー旅の道・寺参・夫婦」(類)。○待合ーマチアハセ。○在郷ー田舎。

○道中、老女房と田舎道にある一里塚の松陰で待合せて一休みするという意。

草むらにたふれ死さへ生かへり

○二一〇。○無常(たふれ死)。

○たふれ死ー行倒れ。

○倒れ死が生き返つたとみたのは、連れと待合わせの間草群に一休みしていた人物が立ち上がったのだつた、という意か、或は一休みしてそれほど元気になったという意か。

○分散衣類売しあたし野

○二一二。○無常(あだし野)。

○分散ー自己破産。債務者の全財産を債権者に委ね、その価額をもつて弁済する。「日本永代蔵」一の五「分散にあへば衣類・刃物も皆

人手にわたりて」。前句「たふれ」を倒産とみた付け。「倒^{ツル}身^{シヅメ}・

商人」(類)。○あだし野ー京愛宕山麓の墓地。「草むら」に付く。

「葦^{アサ}ー墓原」(類)。

○分散にあつた衣類を売却して借金の返済に当て、倒産から立ち直つたというのを、ことばの縁を辿つてこゝう表現した。

十露盤の露塵埃払捨

○二才十三。○秋(露)。

○十露盤ーソロバン。○露ー「あだし野」のあしらい。ただし「阿太師野ー露」(類)は大和のそれ。○払捨ーハラヒステ。上五「十露盤」の縁語。

○算盤の塵埃を払つて、分散衣類を換価する計算をする。「露」に零細の意あるか。

○橋の掃除は月の明ほの

○二才十四。○秋(月、一句こぼす)。

○橋ー「十露盤」に付く。現在山口県岩国市の錦川下流にかかる五橋の反り橋、錦帯橋を俗にそろばん橋という。延宝元年岩国藩主吉川広嘉の考案によって創架されたが翌年五月流失、同年十一月完成した。『岩邑志』に「河中に石台四有テ、石台ヨリ又向ノ石台ニ至

テ柱無シ。唯虹如^レ架^レ天、竜似^レ凌^レ雲、異朝人此美景ヲ賞シテ錦帯ト号。又凌雲橋・凸凹橋トモイヘリ。皆形容ヲ以テ名ク。蓋毎橋長サ廿間程、横二間半、反高サ二間余、総長百二十間」とある。五橋中三橋が支柱のない刎橋で、当時その奇巧によって知られ、いち早く大坂の作者の耳にも届いたと知られる。○月の明ほのー「露」のあしらい。

○残月かかる早暁、そろばん橋の掃除をして、露と共に塵埃を払い捨てた。

大寺ハ淨き流れの水施餓鬼

○二ウ一。○秋(水施餓鬼)。○釈教(同・大寺)。

○大寺ー現在京都市伏見区下鳥羽にある勝光明院の俗称に、普通名詞を兼ねしめる。○水施餓鬼ー流灌頂とも。経木を水に流して死者の霊を慰め、また水辺に四本の竹や板塔婆を立てて布を張り、これに水を注いで難産で死んだ女性の霊を弔う仏事。

○前句の橋の掃除を、大寺の清流で水施餓鬼を行うための準備とみた付け。

○念仏の声もちる柳陰

○二ウ二。○秋(ちる柳)。○釈教(念仏)。

○念仏の声―「水施餓鬼」に付く。○柳陰―「浄き流れ」のあしらい。新古今集卷三・夏の西行歌による「清水―柳陰」(類)の付合。
○水施餓鬼の情況。謡曲「隅田川」「なうあの向の柳の本に人のおほく集りて候は何事にて候ぞ。さん候、あれは大念仏にて候」を下心に置くか。

身を投る最期た、しきつれゝに

○二ウ三。○無常(身を投る・最期)。

○身を投る―「柳陰」に付く。謡曲「清経」により「身を投る―柳が浦」(類)の付合あり。○最期たゝしき―「念仏」に付く。「念仏―臨終」(類)。○つれゝに―一念集中するさま。

○柳の葉の散るごとく水中に身を投げる。その最期の一念集中して、念仏を唱えるのである。

雨より詩作しつほりとして

○二ウ四。○雑

○雨―「つれゝ」に付く。源氏物語「得木」「つれづれと降り暮らしてしめやかなる宵の雨に」から「徒然―永雨」(類)。○詩作―「身を投る」に付く。楚の愛国の詩人屈原が讒言によって江南に左遷され、「懷沙之賦」(「楚辞」所収)を作つて汨羅に身を投げた故

事(「史記」「屈原列伝」)に基く。

○前句の「つれゝ」を無為の寂しさと解し、左遷のつれづれにふさわしく、身を投げるに際して詩を作つたが、これは例の源氏の雨よりしめやかであるといつたのであろう。

なかゝの旅道の記をおもひ佐

○二ウ五。○雑

○旅道―「雨」に付く。「雨氣―旅の逗留」(類)。○道の記―「詩作」のあしらい。

○一句は、「ながゝの旅道……をおもひ佐」という文脈へ、「詩作」をあしらうため「道の記」を嵌め込んだ句法。長々と雨に降りこめられた旅の逗留中、詩を作つて道の記に記し旅愁を慰めるといふ意。

○ほさぬ袖なし羽織枕に

○二ウ六。○冬(袖なし羽織)。

○ほさぬ袖―涙の乾かぬ袖。「うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそ惜しけれ 相模」(後拾遺集卷十四・恋)を踏んで「おもひ佐」を承けた。○袖なし羽織―上着の上に重ね着る袖のない羽織。道中着。

○長い旅の愁いで涙の乾かぬ袖無し羽織を枕にして寝るといふ意。

涙に濡れるのは袖であるのに、袖無し羽織とした滑稽。本歌の文脈は恋であるが、それを伊勢物語九段の倅などをてこととして、羈旅の文脈へと付け転じた点がみそである。

◎足輕は野にふし山にとまり狩

○二ウ七。○春（とまり狩）。

○足輕―前句の「袖なし羽織」を着る人物を特定。○野にふし山にとまり―謡曲「卒都婆小町」「千里を行くも遠からず。野に伏し山に泊る身のこれぞ誠の栖なる」。○とまり狩―野宿して翌朝の狩に備えること。

○夜露に濡れた袖なし羽織を枕に野宿する人物、それは殿の泊り狩に従う足輕であつた。

くミしかすみにいのち延ハる

○二ウ八。○春（かすみ）。

○くみしかすみ―酌みし霞。「霞」は酒の異名。「とまり狩」に着く。「狩の使―酌酒」(類)。○いのち延はる―「抱朴子」に「致天上仙人以流霞一盃飲之」とあり、仙人は霞を飲んで長寿を保つという。ここは譬喩的に、命が延びる思い。

○泊り狩の足輕は仙人のように野に伏し山に泊る。仙人は霞を飲ん

で長寿を保つというが、足輕は酒を飲んで命の延びる思いをする。

◎花の下此春中ハかへるまし

○二ウ九。○春（花・春、花四句引上げ）。

○花の下…かへるまじ―白氏文集「花下忘帰因美景」（和漢朗詠集・謡曲「右近」「吉野天人」「松虫」「桜川」等）。「花」は「霞」の寄合。

○霞を飲んで命を保っているから、この春中は花の美景に親しんで家には帰らないだろう、というのである。

巢立の鳥の声いつきかん

○二ウ十。○春（巢立の鳥）。

○巢立つた鳥は、この春中花下に戯れて古巣に帰るまいから、その鳴声をいつ聞くことであろう。句の背景に「花は根に鳥は古巣に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき 崇徳院」（千載集卷二・春）がある。

月の有夜ハ専に日高く起

○二ウ十一。○秋（月、一句こぼす）。季移り。

○夜は専に…―長恨歌「春從春遊夜專夜」「春宵苦短日高起」。

謡曲「皇帝」にこれを踏んで「春は春遊に入つて夜は夜を専らとし」

「然るに明皇、榮花を極め世を保ち、色を重んじ給ふ故に春宵短きを苦みて日高く起き出で朝政も絶え絶えに」とある。

○月の美しい夜は夜更しをして朝寝をするので、早朝果立つ鳥の聲が聞けない。

秋いろこのむ国はういたり

○二ウ十二。○秋（秋）。○恋（いろこのむ）。

○秋いろこのむ―秋の色を好む（源氏物語の秋好中宮）に、色（女色）を好む意を掛けた。長恨歌「漢皇重色思傾国」によつて付く。

○夜遊に好色にと日高くなるまで起きず、國中浮かれ騒ぐ意。

○たをやめとおとりかたひら恥さらし

○二ウ十三。○秋（おとりかたひら）。○恋（たをやめ）。

○たをやめ―手弱女。遊女のこと（色道大鏡）。『毛吹草』連歌恋之詞。○おとりかたひら―踊帷子。盆踊りに着る単えの着物。単物は絹・木綿、帷子は生絹・麻などをいうとの説あり。○恥さらし―中七から布を晒すに言い掛けた。

○国を挙げての好色、遊女との盆踊りに浮かれ騒ぎ、恥さらしなこ

とだ。

○わか気のいたりいまた直らす

○二ウ十四。○雑。

○遊び女と盆踊りに夢中になるのを、若気の至りだと言つたに過ぎない。

○喧嘩してた、かれ疵も晴かまし

○三才一。○雑。

○若気の無分別はいまだに直らず、喧嘩のたたかれ傷を自慢するありさま。「晴」に「腫」を掛けたか。

○男はならぬ引込思あん

○三才二。○雑。

○男である以上引込み思案はならぬと喧嘩に及び、叩かれ傷を作つて自慢するとみた付け。

◎いさよひの月の踏歌ハ拍子き、

女踏歌ときえ候

○三才三。○春（踏歌）。月十句引上げ。

○いざよひの月―陰曆十六夜の月。○踏歌―ダフカ。『俳諧初学抄』に「踏歌節会 正月十四日也。但男どうか也。女どうかは十六日也。天武天皇より始る。連歌にはあらばしりとあり。京中の遊女の声よきとがらにうたはせらるゝ事あり」。「男―踏歌ノ節会」「十四日―男踏歌」「十六日―女踏歌」(類)。「男」に付く。○拍子き、―拍子とりの上。拍子は笏拍子。笏の半分の形の板を両手で打合せて拍子をとる。

○十六夜の月の下で踏歌を踊る京女は拍子とりの上ばかり。この女を得るためには男たるもの引込み思案はならぬと転じた。

○宗因判詞―「いざよひの月」とあり、付合の上からも女踏歌と読んだと言ひ、付合・句作の妙を賞したのである。

百敷もよき機嫌うらゝに

○三才四。○春(うらゝに)。

○百敷―大宮の枕詞であるが、ここは大宮人そのものをいう。天皇は紫宸殿で踏歌の観覧があり、「踏歌」に付く。

○大宮人は女踏歌の観覧あつて御機嫌うるわしい。

○揚鞠をけふもかさしの花の陰

○三才五。○春(花、裏の花を引上げた異例)。

○揚鞠―蹴鞠で鞠場の木の下枝より高く蹴上げること。「百敷」に付く。「公家―鞠」(類)。○けふもかさしの…「百敷の大宮人はいとまれや桜かざしてけふも暮らしつ 赤人」(新古今集卷二・春)によつて「百敷」をあしらつた。○花の陰―鞠場のかかりに桜を植える。「桜―鞠場」「鞠―花の下」(類)。

○大宮人は今日も桜の花陰で蹴鞠に打ち興じる。天気も機嫌もうららかにだといふのである。

○かハき砂子も散る袴すり

○三才六。○雑。

○かはき砂子―乾燥した砂。鞠場に敷きならしてプレーする。「真砂―鞠場」(類)。○散る―「花」のあしらい。○袴すり―袴の裾が地を摺ること。「袴―鞠」「足摺―鞠」(類)。

○揚鞠が当つて花も散れば、袴が地を摺つて乾き砂子も舞い散る。

○鳥辺野、煙はたえぬ葬礼場

○三才七。○無常(葬礼場)。

○鳥辺野―現在京都市東山区にあつた火葬場。○葬礼場―「袴すり」に付く。「袴―葬礼」(類)。

○葬礼場には乾き砂子が敷きならしてある。鳥辺野の煙は絶えず、

会葬者が次々と地を引きずる椅のため、その砂子も濛々ととび散る。

○鳶もからすもくさめハせぬか

めつらしく候

○三〇八。○雑。

○鳶も鴉もー共に屍肉を食うという。『類船集』『鴉』の条「人の死骸すてたるあたりにむらがり」、同「鳶」の条「捨ててく屍は鳶の餌となり」。「骸ー鳶・鴉」(類)。「葬礼場」に付く。

○鳥辺野の鳶や鴉は、絶えることのない火葬の煙にむせて、くさみをせぬか、という意。

○宗因判詞ー句意はもとより、古典的で嚴肅な「鳥辺野の煙」に、鳶や鴉のくさみを配した俳諧化の奇抜さを賞したのである。

○さかりたる蛸壳憎ミ識る也

○三〇九。○雑。

○さがりたるー「さがる」は魚肉の腐る意。○蛸ー蛸の口中にある上下の顎に当たる一対の咀嚼器を、形状の類似から「からすとんび」と呼ぶ。「鳶もからすも」に付く。「鴉ー蛸」(類)。○憎み識るー俗に、人に識られるとくさめをするという。『譬喩尽』に「噴鼻ニツは識らるゝ表示」。「誇ー鼻ひる」(類)。

○腐った蛸壳を憎み識ると、その「からすとんび」はくさめをするのではないか。

○はしり痔病の口はさかなき

○三〇十。○雑。

○はしり痔病ー「はしり痔」は患部から血のほとばしり出る痔。「痔病」はジャミ。痔を病う人。『本朝食鑑』蛸魚の条「主治、養血益氣強筋壯骨、能入足少陰經血分、或療痔漏逐産後瘀血」とあり、「蛸」に付く。「蛸ー痔病」(小尊)。○口ー患部の口に掛けていう。

○痔を治すために買ったところ、腐った蛸を売りつけられた。そこではしり痔病らしく、口ぎたなく蛸壳を識るというのである。

若衆のミちはすたりし心たて

○三〇十一。○恋(若衆)。

○若衆のみちー若衆道。男色。

○はしり痔の原因は衆道関係にあり、それを口さがなく言いのしるようでは、若衆の道もすたつた心立てだと付けた。

独ねまくなけ打にこそ

○三才十二。○恋（独ね）。

○約束を破って訪ねてこないのは若衆の道もすたれたものだ、獨り寝の憂さを、枕を投げ打ってはらすのである。

○年越の夜におとつるハ鬼やらん

○三才十三。○冬（年越）。

○年越ー立春の前夜。前句を女に読みかえ、節分の夜鬼が女の家を訪れる狂言「節分」を俤にして付けた。「女ー鬼」（類）。

○節分の夜、独寝の女のもとを男ならぬ鬼が訪れる。豆ならぬ枕を投げ打ちにして追い払うという意。

○せんたく衣ぬは、戸をさせ

○三才十四。○雑。

○せんたくー諺「鬼の来ぬ間の洗濯」によって「鬼」に付く。○戸をさせー戸を閉させ。「戸」は「鬼ー戸がくし山」（類）の縁によるか。

○節分の夜には鬼がやってくる。その前に洗濯し衣を縫い、早く戸を閉させ。

○押入のあらぬ先より比丘比丘尼

○三才一。○釈教（比丘比丘尼）。

○押入ーオシイリ。押込強盗。○あらぬ先ー来ぬ先。○比丘比丘尼ー出家した男女。怖じ恐れる意の「びくびく」に言い掛けた。「戸をさせ」に付く。「鑰ー比丘尼」（類）。

○比丘と比丘尼は、押込強盗の来ぬ先から、洗濯衣を縫い終わると、びくびくと戸閉まりをする。

○人のものをもうはそくうはい

○三才二。○釈教（うばそくうはい）。

○うばそくうはいー優婆塞と優婆夷。俗のまま五戒を受け、また仏道修行する男女。前句の比丘・比丘尼に対応する。「うばい」に奪いを言い掛けて「押入」をあしらった。

○強盗を恐れる比丘・比丘尼とは対照的に、人のものを奪う優婆塞と優婆夷。

○御法度を背燈くらかりに

○三才三。○雑。

○背燈ーソムクトモシビ。白楽天「背燈共憐深夜月」（謡曲「俊成忠度」「経政」）を踏むか。

○御法度に背き、燈火に背を向けた暗がりて人のものを奪う優婆塞・

優婆夷の惡業。

○博奕うつけかぬいつぬかれつ

○三ウ四。○雑。

○博奕うつけー博奕にうつつを抜かす愚か者。「博奕うつ」に掛けた。○ぬいつぬかれつー勝つたり負けたり。

○燈火を背にした暗がりて、勝つたの負けたのと御法度の博奕にうつつを抜かす愚か者の有様。

親達のいけん突たてしなんとや

○三ウ五。○雑。

○いけんー異見に劍を言い掛け、「ぬく」をあしらった。「博奕ー異見」(小傘)。○突たてー「劍を突き立て」に、異見に盾を突く意を掛ける。

○親達の異見に盾を突き、博奕にうつつを抜かし、果ては喧嘩沙汰。刀を抜いて突き立て合ひ死のうというのか。博奕に刃傷沙汰はつきもの。「博奕ー喧嘩」(小傘)。

晝置の事とハ、とへかし

○三ウ六。○雑。

○晝置の事ー「晝置」は遺言状。「一、晝置申候事」などと書く。

「しなんとや」に付く。○とはばとへかしー「いきてよもあすまで人もつらからじこの夕暮をとばとへかし。式小内親王」(新古今集卷十四・恋)。

○親たちの異見に盾ついて自害するに至った。その心情は遺言状に書いておいたから見たければ見よ、というのであろう。

○撰集に入ても秘する歌の道

○三ウ七。○雑。

○秘する歌の道ー古今伝授のごとく、秘して明かさぬ和歌の奥義。○撰集に入るほどの歌の上手でも、和歌の奥義は知らせてはならぬ。問うなら秘伝晝に問え、というほどの意か。

○勅勘の身に通路ハならず

○三ウ八。○雑。

○勅勘ー勅命により閉門蟄居して謹慎すること。平家物語卷七「忠度都落」に取材した謡曲「忠度」に「何中々の千載集の歌の品には入りたれども、勅勘の身の悲しさは、よみ人知らずと書かれし事、妄執の中の第一なり」とあるによって前句に付く。○通路ーゆききすること。「道」のあしらい。

○勅勘の身であるから、勅撰集に歌を採用されても、歌の道を秘せられてゐるため、自由にゆきますることが出来ない。本説によつて補完すると、前句は「撰集に入つても名を秘する歌の道」となる。

炭掘山高うして里遠し

○三ウ九。○春（炭）。

○炭掘―「武王（略）号为文王」、東伐紂。伯夷叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。以臣殺君、可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰、此義人也。扶而去之。武王已平殷亂、天下宗周。而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、陰於首陽山。采薇而食之。及餓且死（史記「伯夷伝」）。○山高うして里遠し―謡曲「山姥」「殊にわが住む山家の気色、山高うして海近く、谷深うして水遠し」により、前句「通路はならず」を承ける。

○勅勘の身ゆえ、山高く人里遠く離れて住む。文字通り自由なゆききは出来ず、首陽山に隠れた伯夷・叔齊のように炭を食つて露命をつなぐ、というのである。

○池田の市町かすむ竹へら

○三ウ十。○春（かすむ）。

○池田の市町―摂津国豊能郡。市場町。現在大阪府池田市。市町は

市人の集まる所。○竹へら―竹篋。前句の炭を掘る道具。

○山高く里遠く分け入つて炭を掘る。池田の市中は遠く霞んで望まれ、竹篋も霞む。

札紙を押る木綿の糸遊に

○三ウ十一。○春（糸遊）。

○札紙―書物の表紙。○木綿―「池田」に付く。「毛吹草」諸国名産「摂津、池田・呉服・綾羽・御衣」。呉服・綾羽ともに現在神社・地名として残る。「木綿―摂津国」（類）。○糸遊―陽炎。「木綿の糸」に言掛け「かすむ」をあしらつた。「糸ゆふ―霞の衣」（類）。

○春霞漂う池田市中の書物屋は、表紙を竹篋で押えて、名産の木綿糸で書物を綴じているというのであろう。

定宿しるきまくの紋から

○三ウ十二。○雑。

○定宿―いつも利用する宿。「札紙」に付く。「札―旅宿」（類）。○まく―幕。「木綿―幕」（類）。

○前句の「札紙」を、「何某様御宿」などと書いて宿の入口に張り出したとまり札に取成し、本陣に張り廻らした暖幕の紋柄から、何様の定宿かはつきり分かると付けたのである。

○水の月巴にめくる湯口にて

○三ウ十三。○秋（月、三句こぼす）。

○水の月―水面に映った月影。○巴―紋によくある図柄。「巴―紋所」（類）。○湯口―「幕」に付く。「幕―有馬の湯口」（類）。○前句の「定宿」の湯の有様で、温泉の湧出口に映った月影が、巴の紋様のごとくぐるぐる廻っているといったのである。

つかう長刀打直す秋

○三ウ十四。○秋（秋）。

○長刀―ナギナタ。謡曲「熊坂」「手取りにせんとて長刀投げ捨て、大手をひろげて（略）取らんとすれども陽炎稲妻、水の月かや姿は見れども手に取られず」、同「船弁慶」「夕波にうかめる長刀取り直し、巴波の紋あたりを払」などから、「水の月」「巴」に付く。

○前句を鍛冶場の景とみて、巴御前の使う長刀を打直すというのである。

兵法を習ふに露の隙もおし

○名オ一。○秋（露）。

○兵法を習うのに少しの隙も惜しいが、使う長刀は打直さなければならぬ。「露」は前句の投込みの「秋」に対するあしらい。

臣下を待し諸事の訴

○名オ二。○雑。

○待し―マチし。頼る意。

○兵法を習うのに夢中になって、諸々の訴訟事は臣下に委ねて扱かせた、という意。

○写絵の影に形は添よりて

○名オ三。○雑。

○写絵―ウツシエ。影絵。○影に形は添よりて―「管子」に「臣之事主也、如影之従形也」とあり、前句に付く。「法句経」にも「福楽相追如影随形」と見え、諺語化していた。たえずつき従って離れない譬え。

○まるで影絵の影に形の寄り添うごとく、臣下は君につき従って諸事の訴訟を裁く。

○ミせぬる扇恋のかなめそ

○名オ四。○夏（扇）。○恋（恋）。

○扇―「写絵」に付く。「絵―扇」（類）。

○前句「写絵」を写生画に取成し、扇に書いた写絵のように、いつ

も寄り添っているのが恋の要諦だ、という意か。「かなめ」は扇の縁語。この付合、謡曲「班女」による趣向か。同曲に「月を出せる扇の絵の（略）かたみの扇そなたにも身に添へ持ちしこの扇」などとある。

雲井よりた、もり給へ立名さか

○名オ五。○恋（立名）。

○雲井よりた、もり一平家物語卷一「忠盛又仙洞に最愛の女房をもてかよはれけるが、ある時其女房のつばねに、妻に月出したる扇を忘れて出られたりければ、かたえの女房たち、是はいづくよりの月影ぞや、出どころおぼつかなし、とわらひあはれければ、彼の女房、雲井よりた、もりきたる月なればおぼろげにてはいはじとぞおもふ」とよみたりければ、いとどあさからずぞ思はれける」によつて、前句「扇」に付く。○立名さか「名さか」は悪評。汚名。よくない評判が立つ意。

○忠盛が女房の局に、妻に月を出した扇を忘れていったので、女房たちは「いづくよりの月影ぞや」とからかった。そこで、悪評が立たぬように雲居からだじつと見守つていてほしい、あるいは月光のただ洩りくるように忍んできて下さい、といったのである。一句は「月」の抜け。改訂版の「を聞へさか」は意味不明。

○鶴にのつたる人ハまことか

○名オ六。○雑。

○鶴にのつたる人「述異記」に「荀爽、江夏黃鶴樓上、望西南、有物飄然降、自雲漢、乃駕鶴之寶也、賓主欲對、辭去、跨鶴騰空、眇然烟滅」と見える黃鶴樓の故事、または、「殷芸小説」に「有客相從各言其所誌。或願為揚州刺史、或願多皆財、或願騎鶴上昇。其一人曰、腰纏十萬貫、騎鶴揚州、欲兼三者」とある揚州の鶴の故事。「雲井一鶴」（類）。○まことか「みちのくの安達原の黒塚に鬼こもれるときはまことか、かねもり」（拾遺集卷九・雜）の語調を借りた。○前句「名さか」を奇妙な取沙汰の意に取り成し、鶴に乗つて雲居より飄然と降りて来る人があるという風評が立っているが、まことか、ということである。

○馬さへもおそろしけれハ余所事に

○名オ七。○雑。

○余所事「伊勢物語百二段」背くとて雲にはのらぬものなれど世の憂き事ぞよそになるてふ」によつて前句に付く。

○自分は馬に乗るのさへ恐ろしくて余所事（よそこと）にしているのに、鶴に乗つた人があるなんてまことでしょうか。

○負し軍のあはれ落あし

○名オ八。○雑。

○馬に乗るのも恐ろしいという前句に対し、軍に敗れて落ちゆく武者のあわれさを付け寄せた。「落」に落馬の意をかくしているか。

運は天に任て三年山こもり

○名オ九。○雑。

○運は天に任て―跡「運は天にあり」による。○三年山こもり―那智の山籠りは三年（類）。

○運を天に任せて、三年間那智の山に隠れ住む。前句落武者の行末である。

○父のあとしきかねへらハへれ

○名オ十。○雑。

○あとしき―類船集は「跡職」の字を宛てる。跡式・跡敷とも。相続される財産。

○父の跡を継いだが、遺産の減るのもええままと、三年間那智山に籠って喪に服する。親の死に対する服喪は三年。「三年―喪にあはる」(類)。

○飛驒たくミ細工道具を又もせん

○名オ十一。○雑。

○飛驒たくみ―飛驒国（いまの岐阜県北部）から毎年交替で朝廷に出仕し、公役に従事した工匠で、建築工事が主な仕事であった。前句の「かね」を大工道具の曲尺とみて付けた。

○父の跡を継いだ飛驒の匠が、父の遺品である曲尺が使い減ろうと構わない、新しい細工道具をまた造るまでだと胸を張った場面。

禁裏の御普請おいそきの比

○名オ十二。○雑。

○前句の原因・理由を付け寄せた句。寛文十三年（延宝元年）五月十二日、京都大火、仙洞御所がすべて焼失した。『徳川実紀』に「大風にて大内をはじめ法皇・新院・女院の御方に延焼し（略）主上は近衛の邸に行幸。上皇・新院はまづ白川照高院へ御幸ありて、やがて上皇は有栖川、新院は八条の邸へうつらせ給ひ、本院・女院・女三院は女五宮の御方へうつらせたまひ、三種の神宝は白川へわたしまいらす（略）其ほか、鷹司はじめ摂録・竹園・月卿雲客の家々多く火にかゝる」と記す。幕府は急提内裏の再建にとりかかり、延宝三年十一月に竣工。『徳川実紀』延宝二年の条には、大内構造の

ことが頻繁に記されており、まさに「禁裏の御普請おいそぎの比」であつた。この付合は、この事実に基づくものであらう。よつて本百韻の成立は延宝二年冬を下らぬと推定される。

月夜よし東の君の上落

○名オ十三。○秋（月夜、月の定座）。

○月夜よし。「月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず。よみ人しらず」（古今集卷十四・恋）。○東の君ー徳川將軍。延宝二年當時は家綱。○上落ー上洛の誤りだが、當時「洛陽」を「落葉」または「洛葉」と表記することがしばしばあつた。たとえば寛文七年刊「俳諧小相摸」は京の点者の肩書をすべて「落葉」または「落葉住」と記し、同十三年九月刊「俳諧歌仙画図」の序者雲愛子の肩書に「洛葉之住」とするなど。

○徳川將軍の上洛を受けて、禁裏の普請は月の夜も休まず進められている。

露またすしもあらぬ商ひ

○名オ十四。○秋（露）。

○露ー「月夜」に季を合わせ、副詞「少しも」に、豆板銀の意を兼ねしめた語法。○またすしもあらぬー前句に引いた古今集の本歌取

り。○商ー「上落」に付く。「商ー御上落」（類）。

○將軍の上洛で京都に金が落ちる。たとえば寛永十一年七月家光上洛のさいには、銀十二万枚が京衆に与えられた。そんなわけで、商人たちも、そのおこぼれにあずからないではない、というのである。

○新米の出来世の中ハ寤きて

○名ウ一。○秋（新米）。

○世の中ー稲の作柄。とくに豊作をいう場合が多い。○寤きてークツロきて。

○今年は新米の出来がよく、世の中はうち寛ろぎ、商いの方も実入りが期待できる。

○秋まつり客したる行水

○名ウ二。○秋・神祇（秋まつり）。

○したるー客を呼ぶ・行水をするの両意。

○米作の出来具合がよく、暮しにも余裕が出来たので、秋祭りに客を招き、のんびり行水などさせて寛くことである。

生るをハ放つ手每ハ醒し

○名ウ三。○秋・神祇（生るを放つ）。

○生るをば放つー放生。前句の「秋まつり」を八月十五日石清水八幡宮の放生会と説んだ付け。

○放生会で魚を放った手が腥いので、祭の客人は行水をして洗います。

○ミやけにかたれしま好む池

○名ウ四。○雑。

○しま好むー「しま」は島。泉水や築山などのある庭園。伊勢物語七十八段「三条の大御幸せし時、紀の国の千里の濱にありける、いとおもしろき石たてまつれりき。大御幸の後たてまつれりしかば、ある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを、島このみ給ふ君也、この石たてまつらんとたまひて、御隨身、舍人して取りにつかはす」による。

○泉水・築山などの趣向を凝らした放生池に、手毎に魚を放ったことを、故郷への土産話に語れ、という意。島（林泉）は「神泉苑ー放生」（類）の連想によるか。

○紀伊国の千里の濱の石の景

○名ウ五。○雑。

○紀伊国ーキノクニ。和歌山県。○千里の濱ーいま日高郡南部の海岸。

岸。

○前句に引いた伊勢物語を踏まえる。「しま好む池」とはこの句の景をうつした林泉との意。

拾ふ貝から盆山に見ゆ

○名ウ六。○雑。

○拾ふ貝がらー「紀の国のなくさの濱に貝ひろふあまのめざしの音なかりせばよみ人しらず」（夫木抄第二十五・濱）を踏んで、「紀の国の：濱」に付く。○盆山ーボンサン。風趣のある自然石を盆の上に据え、山岳を模して愉しむもの。「盆山秘言」に「石にて見るときは盆石という。盆にすゑて見る時は盆山というなり」。

○紀の国の千里の濱を模した盆景では、拾ってきた貝殻はあたかも盆山のごとく見える、というのであろう。

○花入に籠を懸たる床の内

○名ウ七。○春（花入、花の定座）。

○籠ー「拾ふ貝がら」のあしらい。「類船集」「籠」の条に、前句に引いた夫木抄の歌を掲げ、「此歌はおさなき物かと藻汐草に出しは、大かたかこ也」とある。○床ー盆山に付く。「床ー盆山」（類）。

○床の間に盆山があり、籠の花活けが掛けられている。

節ふるまひに來なけ鶯

○揚句。○春（節ふるまひ・鶯）。

○節ふるまひ一年頭の祝いに親類縁者を招き、酒食などでもてなす行事。「日次紀事」に「凡新年（略）京師俗自「元日」至「晦日」親戚朋友互設「酒食」饗応謂之「節」とある。「節（セチ）」は籠の竹の縁。
○鶯「籠」に付く。「籠ー鶯」（類）。

○床の間に花活の籠を掛けたから、鶯よ、節振舞に來て鳴いてくれ。
節振舞の客は鶯であつたという次第。

愚墨 六十句

長 廿六

梅翁判

（いぬい ひろゆき／本学教授）